大濱永亘

オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽雄一門の人々

先島文化研究所

凡例

◎本書に使用する年号は西暦で統一した。
◎本書に引用した古文書・文献史料・家譜などは誤字や脱字を含めて原文通りとした。
　明らかな誤字・脱字の場合は「ママ」と振り仮名を入れた。
◎変体仮名の「者（も）」「江（へ）」「而（て）」「茂（も）」「与（よ）」「里（り）」など
　は文字のポイントを落とし、「ゟ」（より）も引用文のまま用いた。
◎引用した原文に現代語訳がないものについては、石垣市史編集課主事の得能壽美氏
　に要約をお願いした。
◎家譜からの写しなどの場合、複数回の複写や複写の際の誤写があると思われるが、
　特に人名については漢字として成立していないものも文字を合成して「作字」した。
◎本文内の引用文献のかっこ内は（発行年／発行者）とした。また、人名については
　西暦でかっこ内に（生年～没年）を付した。
　例＝山陽姓大宗宮良親雲上長光（一五八四～一六六一年）
◎家譜紛失で本家との関係が不明のときは、八重山蔵元廃止（一八九七年）頃の住所
　や当時の姓名を参照し、同一姓で隣に屋敷を構えている場合などは分家とした。
◎家譜紛失者の世代、家族構成については他の家譜などから調査した。
◎分家した者については新たに図式化した。
◎嗣子（養子）の各世については家譜の記載に従った。
◎八重山蔵元廃止後に大和風の名前に改める女性が多く、また除籍簿との不一致もあ
　るが、通常呼ばれていたと思われる名前を採用した。
◎戸主には「〇」印を付し、妻・婿養子は「（ ）」で括った。
◎巻末の「山陽姓『長』の名乗り録」で、童名・仁也名・生没年・享年・最終役職名
　が空白の部分は、家譜に記載がない場合（紛失）や今回の調査で確認できなかった
　もの（最終役職は無役も含む）。
◎本書に記載した住所氏名は明治四十三（一九一〇）年「四三　地籍簿」を参考にした。

山陽姓の先祖那礼当一族が居住した美良底村一帯の現在の様子

写真提供：沖縄県八重山支庁農業水産整備課（1995年1月19日撮影）

山陽姓長光の先祖、那礼当一族が統治し居住していた美良底村跡・ビロースク遺跡

那礼当の妹、真乙姥の神御墓が格上げされた真乙姥御嶽

川良山大浜の主

山陽氏十一世　大濵　長照

尊敬してやまない大濵永亙氏が、長年の調査研究の成果を『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』として上梓されることは、とりわけ山陽姓一門にとってこれほどの感謝の念はなく、一門の一人として衷心より讃辞をおくり最大の喜びとしたい。永亙氏は嘉善姓の出身だが『嘉善姓一門と八重山歴史』を一九八九年に著し、母系は山陽姓と紹介されている。従って、嘉善姓と山陽姓を継ぐ永亙氏によって両書の研究出版された経緯は、因果に富み運命的でさえある。あの八重山学の父、喜舎場永珣翁も出自の嘉善姓研究未完のままにして、永亙氏がこれを完成させた功績は特筆に値すると言える。本書の調査研究は想像以上に労苦を要したと考えられ、ち密丹念に系図を調べ、関係者を訪ね位牌調査も不可避であっただろう。心から敬服しこの労作が今後の八重山研究に貢献されんことを祈念したい。

川良山入り口に「枯華微笑」と刻んだ頌徳碑が一九五二年に建立された。山陽姓第四世大浜親雲上宮平長延を顕彰するため、宮良長詳氏ら山陽姓一門が総力をあげ建立したもので、当日の式典祝賀会へ父に連れられ幼少の私も行った記憶は、今なおおぼろげだが、消えていない。宮平長延は治山治水、農林政にすぐれ八重山の蔡温と称されるが、私財を投

じ川良山道を切削開通させたことでよく知られる。また宮良川橋を建設したのは祖父・宮良長重で、その頌徳碑は宮良川のたもとに建っている。

宮良長詳氏は九州大学医学部出身の医師で、八重山支庁長も勤めたが、自身山陽姓へのこだわりは有名であった。宮平長延頌徳碑建立式辞で、特に山陽姓一門へ長延翁を「川良山大浜の主」と呼称するよう懇願し、厳しく注意を求めている。長延翁の生涯は、誠実、高潔、顕著な勲業功績に輝くものであったが、晩年は策謀によって無実の罪を背負い獄舎で自ら余命を絶ち「牢屋大浜の主」と俗称されていることを決して赦してならないと断じ、「川良山大浜の主」長延の子孫として正義あふれる言辞を残し、あの世の長延翁と約束した翁の無念を今ここに晴らさんと長詳氏は叫んだ。

長詳先生に診てもらった時、山陽姓の子だから医者になれと励まされた思い出が今も忘れられない。

ところで、昨年生誕百二十年になる宮良長包の父、長英と私の曾祖父・長光は兄弟で、彼らの父・長恭は登野城目差であった。登野城にも山陽姓が少数存在することと関係深いのであろう。しかし、山陽姓の一族は新川村に多数住み、さかのぼれば一族の発祥は、美良底村にたどりつくと永亘氏は究明している。那礼当が山陽姓の始祖ということである。

長田大主の実弟、那礼当とその一族たちを美良底村からたどりながら、山陽姓の人々と出会う時空を旅する本書は、未来へこれからもさらに続く。

（石垣市長）

序文に寄せて
「源遠流長（みなもとはとおくながれはながし）」に思う

山陽氏十三世　神山長藏（在・那覇市）

『山陽姓大宗長光家譜』には「それ天下の諸家の正統は一門の綱領なり　これつまびらかにすれば　則ち支流これにしたがう」と記されています。この度、この綱領に値する大濵永亘著『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』が上梓されたことを心から喜び、著者に深甚なる敬意を表し感謝申し上げます。

著者は、旺盛な探求心をもった考古学者として知られています。ご母堂が山陽姓のご出身であることから、長年にわたり一門について調査研究されてこられました本書は、まさに労作だといえます。

私は、平成三年に沖縄県八重山支庁長として石垣に赴任し、本家にご報告にまいりました。当月（四月）に清明祭があることを知りお参りいたしましたが、昔日の賑わいはありませんでした。今日の社会世相がそうなのか、ルーツをたずね先祖を崇拝する心の希薄さによるものかと思いめぐらした次第です。石垣市の拙宅仏間には「源遠流長」の扁額が掲げられていますが、生前父はこれを見るにつけ「先祖は遠くにおわし、子孫は永遠に栄え行くものだ」と諭すように話していました。

家譜序文には「ここにおいて旧記・伝聞等をたずね　まさに本家の根源を究め後世の子孫に本（もと）の系譜を知らしむるために備う」とも記されています。私は本家をたずねて門外不出の系図を借り受け、これを複写し「山陽姓一門系図編集要領」を作成しました。そして、四ヶ字の有志にお集まりを願い、大正九年に十一世宮良長智翁が作成された系図を補完しようと試みましたが、職掌柄多忙でその意を達することが出来ませんでした。そのことが気掛かりであっただけに、大濵永亘氏が『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』を出版されたことは、私にとっては快哉であり、一門にとっても名誉なことだと存じます。

本書は、山陽姓一門が八重山の発展に寄与した様子が活写されています。宮良橋のたもとにある二世宮良長重翁頌徳碑やバンナ公園入り口にある川良山・大浜主宮平長延翁頌徳碑を見るにつけ、先祖の偉業を誇りにし子孫への最大なメッセージだと思っています。

結びにあたり、大濵永亘氏が 益々ご健康でご研鑽を積まれ学績を高められることと、併せて山陽姓一門の繁栄を祈念いたします。

（元沖縄県八重山支庁長）

出版を祝して

山陽氏十三世　瀬名波　長宏

昭和三十四年の夏、石垣島測候所の東方はサンゴ礁の岩塊が広がり、周辺には竜舌蘭が群生し、畑地の中に山原貝塚が分布していました。早稲田大学考古学発掘調査団の中に数人の学生帽をかぶった手伝いの少年たちが見えます。大浜少年もその中の一人であったに違いありません。

翌年の昭和三十五年五月の『沖縄タイムス』紙上では、早稲田大学考古学調査団との出合いと深い結びつきが紹介され、大浜少年の考古学への大きな夢が果てしなく広がっていきました。考古学に魅せられ、大きく羽ばたいた大浜少年のその後は、八重山の考古学界の先駆的役割を果たし、数々の遺跡の発見や紹介等で、第一人者としての存在をゆるぎないものにしていき、万人の評価は極めて高いものとなっています。

当時、私も琉大の夏期休暇で帰省中であり、調査団のみなさんは遺物の鑑定（特に貝類等）にあたっては、祖父・長宣のところへよく訪ねて来ていました。また、八重山方言についての調査でも来訪が多かったので、結構私も祖父の側にいて勉強になりました。

さて、大濵先生は高校の教師のかたわら、学究としてのあくなき姿勢は、専門の考古学

関連の数多い論文発表をなし、また、著書では昭和六十三年に出版した『嘉善姓一門と八重山歴史〜嘉善姓一門世系図〜』で嘉善姓一門のルーツを探り、八重山の歴史の中で果たした一門の役割等について詳述した、八重山では未開拓の分野での著述でした。また平成十二年には『八重山の考古学』とお父さまの『大濵永丞私史―八重山「濱の湯」の昭和―』でそろって第三回日本自費出版文化賞に輝くなど、地方史・自分史が見直される中でのすばらしい研究業績を残されています。

現在は「先島文化研究所」を主宰し、意欲的な研究の取り組みの中で、今回出版された『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』は、私たち山陽姓を名乗る一門にとっては、大きな贈りものとして、門中の意識の高揚と結束を強めてくれるものとして感謝申し上げます。大濵先生のお母さまや祖母が山陽姓一門の出という、些細で見過ごされそうな中から研究の端緒を開かれたことに敬意を表したいと思います。

私は大宗長光から数えて十三代、瀬名波家では七代目にあたります。一五〇〇年以来、八重山の頭職は約百名が任じられています。長栄氏（大宗長田大翁主信保）と山陽姓がその約三分の一を占め、八重山を統括した双璧と呼ぶにふさわしく、わが山陽姓の先祖の社会事業等における事蹟も八重山の歴史に燦然と輝いています。栄誉ある山陽姓の氏子の一人として、昨年第九代目の会長に就任しました。一門会の再興に取り組んでみたいと強く念じている矢先の出版は、山陽姓一門会はもとより、研究者のみなさんにとっても、格好の学術書となるに違いありません。出版を心からお祝い申し上げます。　（山陽姓一門会会長）

「山陽姓一門」の歴史誌に謝す

山陽氏十二世　渡久山　長輝

この度、大濵永亘先生のご努力によって本書が上梓をみたことに、心から感謝を申し上げます。

私が山陽姓氏子を自覚したのは、戦後の小学生のころであった。大宗家兼本仁也家のお墓での清明祭の時であった。母のすすめで、男兄弟がそろって、お墓へお参りした。門中一同、長老の合図で礼拝し挨拶があった。その後、子ども達には、持ち寄った各家庭の料理を頂き、学事奨励として、鉛筆やノートなどの学用品をくださった。私達、兄弟もアンノーの宮良長詳叔父達の前に出て、一人ひとりに手渡された。

「よく勉強して、先祖の名前をあげなさい」と八重山方言で、口々に云われた。

あれから何年もたって、ある祝賀会の席で弟二人が「川良山節」を踊った。その歌詩には「川良山ぬねーぬらば、山道ぬねーぬらば」とあった。母は、この山道を開いた人は、宮平長延翁で、山陽姓の先祖だと教えられた。

高校を卒業して、名蔵中学校（旧石垣嵩田分校）で教員をしたとき、この川良山道を毎日、自転車でかよった。夜が更けこの帰りの山道には、馬や馬車に乗った農帰りの人が、トバラーマなど歌っていた。その度に私は、川良山節を口ずさんでいた。遠くの先祖に想

祖に想いをいたしながら。――今、山裾に記念碑があり、宮良長和氏がお世話されているときく――。

大濵永亘先生から、山陽姓の先祖は「那礼当」で、本家・徳山の後の長田大父墓も、新川の真乙姥御嶽も関係があると教えて下さった。先生は「山陽姓一門の系図」を作成すべく調査しておられる。本書も先生にとって大切な学問研究でしょうが、私達一門にとっては「温故知新」のよき手本である。

先祖の有難さは、年を重ねるごとに、身をもって識られる。

本書もきっと八重山の歴史のみでなく、私達に大事な生き方を示唆してくれるのであろう。感謝にたえない。

中央教育審議会委員　(財)全国退職教職員生きがい支援後援会理事長